

玉泉館旧蔵資料中の弥生時代農耕関連鉄器・石器について

松尾 樹志郎

九州大学地球社会統合科学府博士後期課程：〒819-0395 福岡市西区元岡744
m.mikishiro@gmail.com

要旨：九州大学総合研究博物館に所蔵されている玉泉館旧蔵資料には、弥生時代の農耕に関連する遺物名で登録されている資料が鉄器2点、石器23点ある。本稿ではこれらの資料について、採集地の精査や遺物自体の特徴の整理を通じ、必要に応じて器種認定の修正を行いながら、可能なものについては資料の持つ意義について考察した。

キーワード：玉泉館旧蔵資料、弥生時代、農耕、鉄器、石器

I. はじめに

本稿は、九州大学総合研究博物館所蔵の玉泉館資料中の弥生時代の農耕に関わる考古資料を報告したうえで、位置づけを行うものである。

玉泉館資料のうち、弥生時代の農耕に関する器種として登録されているのは、下記の鉄器2点・石器23点である(表1)。これらの中には資料的な価値が高く今後研究に活用されるべきものが多いが、実測図が公開されていなかったり、器種の認定を再考する必要性があったりと、現状公開されている基礎データには不十分な点もある。そこで、本稿では今後の活用という観点からこれらの資料について整理・報告したうえで、可能なものについては資料の位置づけを行う。

II. 鉄製方形板刃先¹(図1・写真1)

(1) 資料の概要

玉泉館資料中の鉄製方形板刃先は、資料番号3134、3135の「鉄製鋏先」として登録されている2点である。2点とも昭和4年12月31日に「浮羽郡水縄村小学校東方」で発見された資料とされる。寄贈者は鬼塚貞治氏と、久留米の出身であり当時まだ学生であった鏡山猛氏である。

鬼塚貞治氏については、鏡山氏の論文「原始箱式棺の姿相(二・完)」の中で、「筑後浮羽郡水縄村字大塚に於て、當地の郷土調査に熱心であつた平山貞治君によつて發掘調査が行はれ、…(中略)…竪穴式小石室が発見されて同じ鬼塚君の手によつて調査された。」(鏡山1942: pp.65-66)との記述がある。こうした記述を考慮すると、本資料も鬼塚氏と鏡山氏による水縄村周辺の調査の一環で採集されたものであると考えられる²。

次に、表採地とその周辺の歴史環境について概観しておく。まず、表採地点である「水縄村小学校東方」について、水縄村とは旧浮羽郡に存在した村であり、1954年に田主丸町に合併、田主丸町はその後2005年に久留米市に編入されている。水縄村の小学校としては、明治24年に前身の石垣小学と麦生小学の簡易科が改められる形で設立された水縄尋常小学校がある(田主丸町誌編集委員会編1997)。水縄尋常小学校は現在の久留米市立水縄小学校として存続しており廃止されていないので、昭和4年時点での「水縄村小学校」とは水縄尋常小学校を指すと考えてよい。『田主丸町誌』に掲載されている年表によれば水縄小学校は校舎の増築・改築を数回行っているが(田主丸町誌編集委員会編1997)、過去の地図や空中写真と現在の地図とを比較した限りでは敷地の移動はない。したがって、表採地点は現在の水縄小学校(久留米市田主丸石垣所在)の東側に特定できる。

表1 玉泉館旧蔵弥生時代農耕関連遺物一覧

図番号	器種	発見地 ^{※1}	寄贈者	登録番号	記載番号	登録遺物名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
1-1	方形板刃先	浮羽郡水郷村小学校東方	鏡山猛・鬼塚貞治	3134	3134	鉄製鉄先	11.1	6.3	0.2	71	昭和4年12月31日採集
1-2	方形板刃先	浮羽郡水郷村小学校東方	鏡山猛・鬼塚貞治	3135	3135	鉄製鉄先	10.7	6.1	0.2	66	昭和4年12月31日採集
7-1	石胞丁	福岡市南区雑餉隈駅附近 ^{※2}	瀬尾外典蔵	2607	2119	石胞丁	14.8	3.3	0.8	55	
7-2	石胞丁	春日市須玖岡本	久我辰實	2608	2142	石胞丁	13.3	4.9	0.7	71	
7-3	石胞丁	三瀬郡三瀬村大字高三瀬字裏畑	中山平次郎	3572	321	石胞丁片	3.9	3.2	0.5	8	
7-4	石胞丁	三瀬郡三瀬村大字高三瀬字東畑 ^{※3}	中山平次郎	3573	322	石胞丁片	4.9	2.8	0.7	12	「塚崎西畑」の墨書き
7-5	石胞丁	三瀬郡三瀬村大字塚崎字東畑	—	3575	325	石胞丁片	3.8	2.7	0.6	9	
7-6	石胞丁	日田郡日田	岡為蔵	3576	326	石胞丁片	5.5	4.3	0.7	23	
7-7	石胞丁	宗像郡神興村大字津丸	玉泉大梁	3577	328	石胞丁片	14.4	7.8	0.7	69	大形石胞丁の可能性あり
11-1	大型蛤刃石斧未成品	糸島郡今宿町今山	玉泉大梁	3904	415	石鎌	13.4	7.6	3.2	428	大正14年3月17日採集
11-2	大型蛤刃石斧未成品	糸島郡今宿町今山	玉泉大梁	4009	421	石ナタ	22.2	9.2	3.5	1097	
11-3	大型蛤刃石斧未成品	糸島郡今宿町今山	玉泉大梁	4006	417	石ナタ	21.4	9	5.2	1391	
11-4	大型蛤刃石斧未成品	糸島郡今宿町今山	玉泉大梁	4059	418	石ナタ	23.2	9	4.2	1510	「今山」の墨書き
11-5	剥片	糸島郡今宿町今山	玉泉大梁	4007	419	石ナタ	28.2	9.2	6.4	1547	
11-6	剥片	糸島郡今宿町今山	玉泉大梁	4008	420	石ナタ	25	8.8	3.8	1085	「今山」の墨書き
11-7	素材	糸島郡今宿町今山	玉泉大梁	3905	416	石鎌	17.3	9.5	5	965	大正14年3月17日採集
11-8	素材	糸島郡今宿町今山	玉泉大梁	4010	422	石ナタ	21.9	10.1	5.5	962	
12-1	不明	糸島郡今宿町今山	玉泉大梁	3584	333	石胞丁?	18.6	11	2.5	652	
12-2	石鎌?	糸島郡小奮土村松原	玉泉大梁	3963	2188	石胞丁	9.4	7.6	0.8	110	
12-3	不明	—	—	4099	9448	石胞丁未成品	8.9	5.9	1.2	94	
12-4	自然石?	築上郡南吉富村上垂水	玉泉大梁	3578	330	石胞丁?	10.8	5.6	1.8	128	
12-5	自然石?	糸島郡今宿町今山	中山平次郎	3579	331	石胞丁?	13.3	4.5	1.8	186	「筑前糸島郡今山」の墨書き
12-6	自然石?	糸島郡今宿町今山	玉泉大梁	3901	332	石鎌	14.7	4.5	3.1	288	「今山」の墨書き、大正14年3月17日採集
12-7	自然石?	糸島郡今宿町今山	玉泉大梁	3903	414	石鎌	18.1	7.6	3.7	574	大正14年3月17日採集

※1 「発見地」は遺物カードないしラベルの情報をそのまま引き写している

※2 雑餉隈駅が南区に編成されていた時期はおそらくなく、博多区所在である

※3 墨書きでは「塚崎西畑」となっていたため本文中では塚崎西畑採集とした

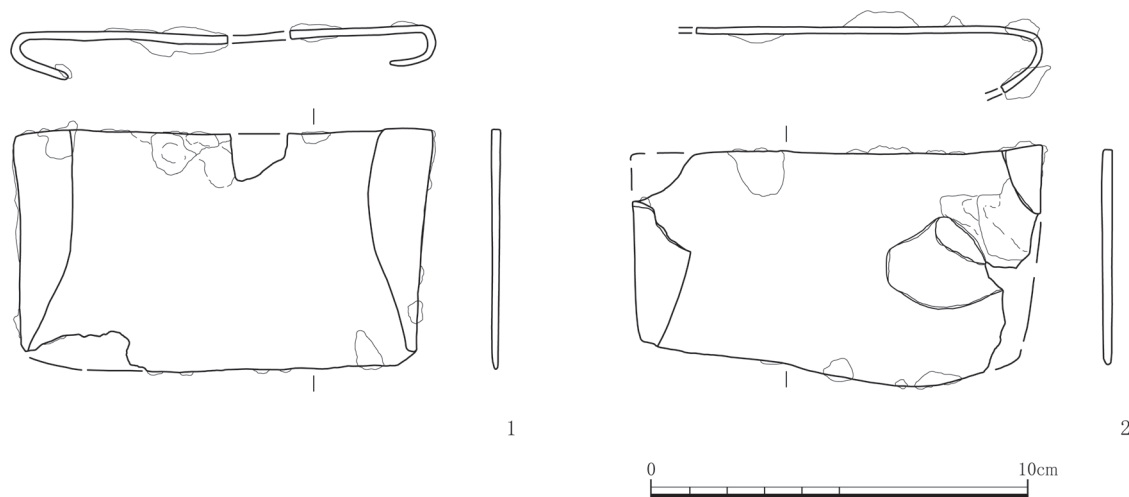


図1 玉泉館旧蔵方形板刃先（縮尺1/2）

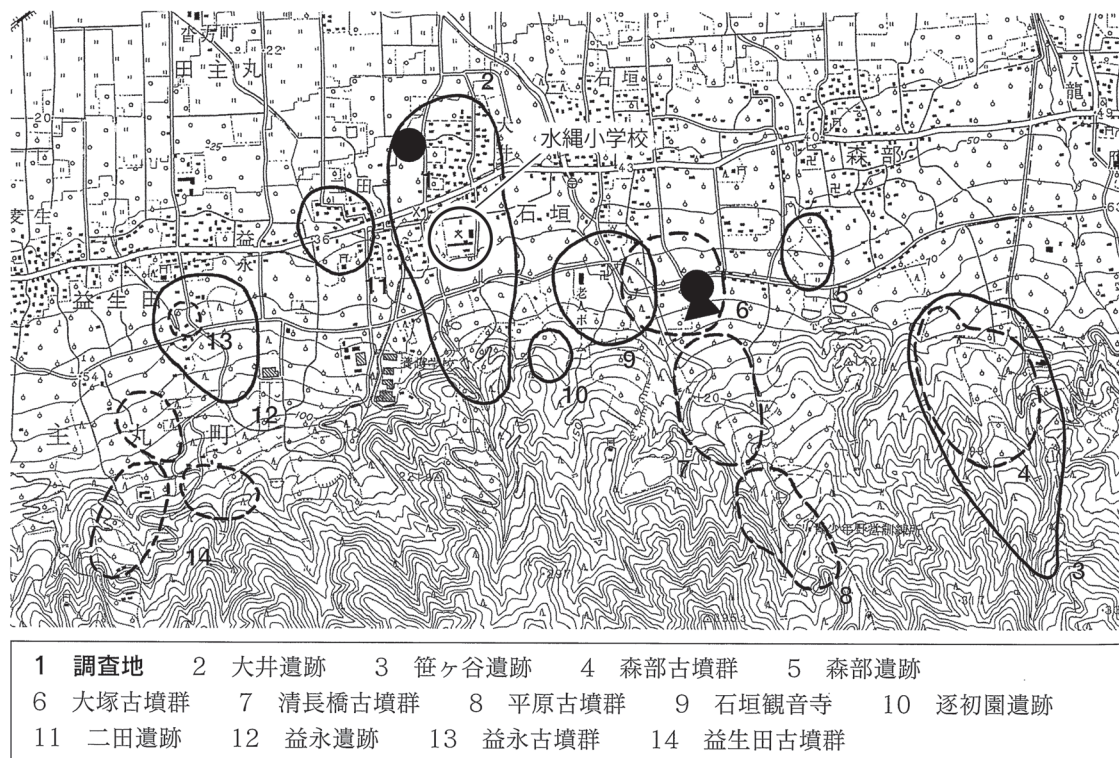


図2 水縄小学校周辺の遺跡分布（江島（2006）に加筆）

水縄小学校が所在する石垣地区周辺には耳納山地北麓に田主丸大塚古墳を始めとする古墳が存在する（図2）ことが古くから知られているが、先述の鏡山氏の論文では、水縄村字大塚に対し、「遺蹟地一帯は原始時代高塚横穴式石槨墳の群集地であるが、間々甕棺箱式棺の存在するものもあり、又彌生式土器石器類も散布する所もあり、先史時代以降永い間聚落地として現世及來世の生活を営んで来た地域である。」（鏡山前掲：pp.65-66）との記述があり、弥生時代遺物の存在も古くから知られてい

たことが分かる。現在登録されている遺跡名で言えば、水縄小学校周辺には大井遺跡が広がっており、久留米市によって遺跡範囲の北側部分で2回の発掘調査が行われている。1次調査では包含層から弥生土器片が出土しているようだが、遺跡の具体像は判然としない（江島2006、小川原2018）。しかし、田中幸夫氏が収集した考古資料をまとめた『田中幸夫寄贈品目録』（九州歴史資料館（編）1982）によれば、石垣周辺では弥生時代の土器や石器に加えて内行花文鏡系の小型仿製鏡、さらに目録では「乳

棒状石器」とされているが、朱をすりつぶすための道具であるL字型石杵の完形品が2点表採されている。田中氏の遺された地図（図3）を参照すると、弥生時代遺物の表採地点は小学校の東側に集中しており、「水繩村小学校東方」採集である本資料も同一の弥生時代集落、おそらくは大井遺跡の遺物である可能性が高い。

(2) 資料の特徴と位置づけ

上述の背景をふまえた上で、本資料の特徴について記述する。

1は、背部と刃部左隅を欠損するが完形に近く、長さ11.1cm、幅6.3cm、厚さ2mmを測る。木質の遺存は見られない。折り返しは下端が鍛打によってつぶれきっておらず、下端までラインが明瞭である。刃部右隅の角が少し取れているが、刃部が直線的であることから、あまり磨耗していない状態であると考えられる。

2は、折り返しが両側とも破損しているが、全体の形状は推定可能であり、長さ10.7cm、幅6.1cm、厚さ2mmを測る。破損部の破断面が新しいことから、比較的最近の破損の可能性がある。木質の遺存は見られない。折り返しが破損している一方で刃部は右隅を除いて破損していない。したがって、刃部がカーブするような曲線となっているのは磨耗ないし磨耗に伴う研ぎ直しによるものと考えられる。左側の折り返し下端部が刃部と接していることから、刃部左側が使い込まれていることがわかる。

以上のように、本資料は欠損部位があるものの遺存状態は良く、全体の形状や法量をもとにほかの資料と比較検討することが可能である。そこで、弥生時代から古墳時代前期にかけて出土した方形板刃先の類例を参考に、本資料の位置づけを考えてみたい。

方形板刃先にとって最も重要なのは装着する木器との組み合わせであり、それを規定するのが着柄部の幅である。そこで、図4に、北部九州出土方形板刃先の着柄部横幅と、木製の一木鋤および直柄狭鋤の刃部横幅を度数分布として示した。このグラフから、資料数の多い弥生時代後期後半から終末期（一部古墳時代初頭にかかる）にかけて、着柄部横幅のピークが10cm台にあり、直柄狭鋤もしくは幅が狭い鋤を志向して製作されていることが分かる。本資料の着柄部横幅は1が10.8cm、2は折り返し部の破損により正確には測定できないが10cm台には入る。したがって、本資料は着柄部横幅10cm台をピークとする

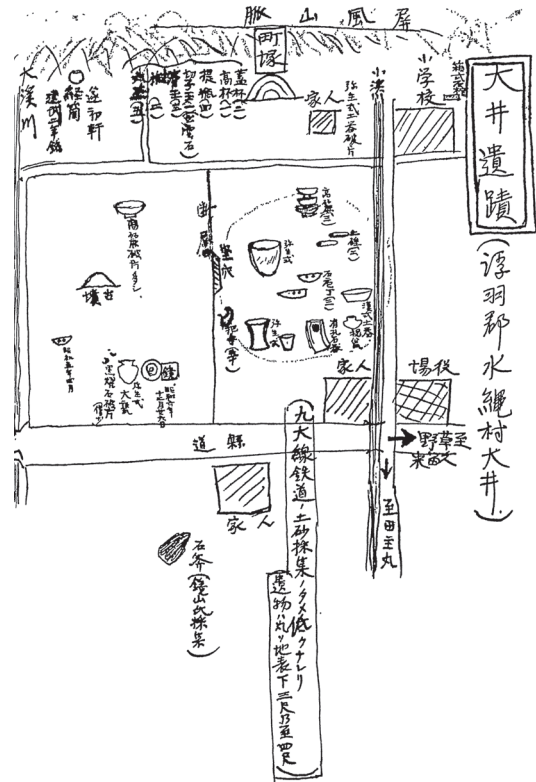


図3 田中氏作成の地図（九歴（1982）から抜粋）
図中下が北方向

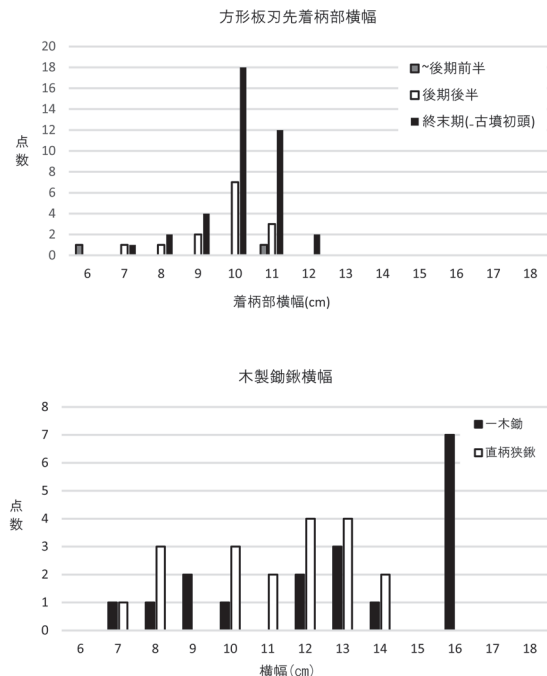


図4 方形板刃先と木製鋤鍬の幅比較

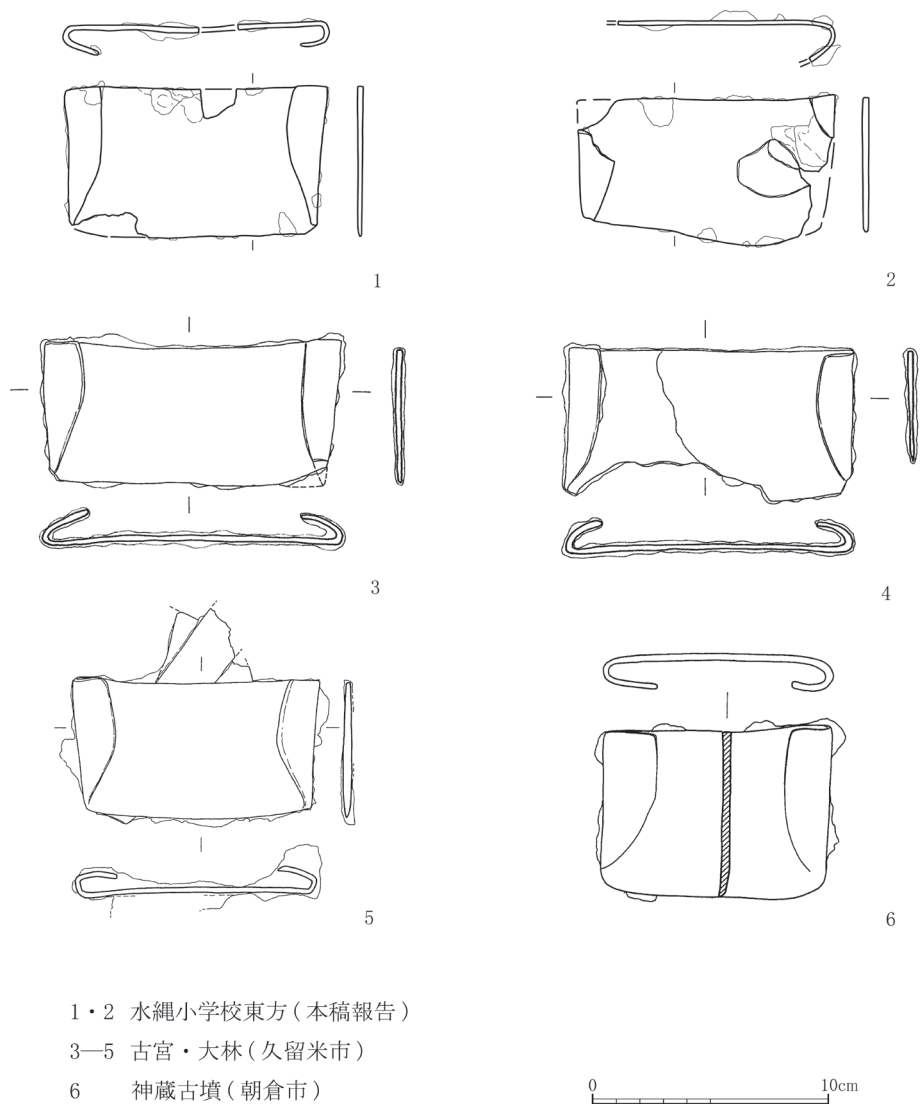


図5 方形板刃先の類例（縮尺1/3）

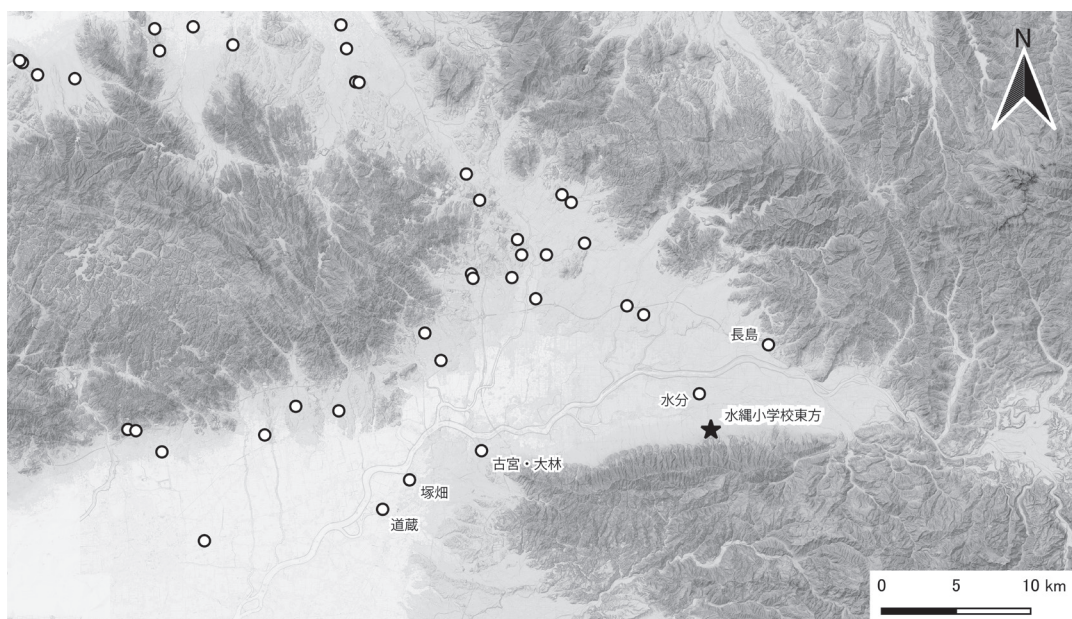


図6 筑後川中下流域周辺地域における方形板刃先出土遺跡分布

北部九州の後期後半から終末期の特徴を持っていると言える。特に全体的な形状やサイズから見て、同じ久留米市内に所在する古宮・大林遺跡の資料(図5-3~5)などはかなり類似している。一方で古墳時代前期には方形板刃先自体の出土数が大幅に減少し、僅かな例が知られるにすぎない。筑後地域の前期古墳では朝倉市神蔵古墳に出土例があるが(図5-6)、神蔵出土品は弥生時代のものに比べると横幅が少し狭く平面形態が正方形に近づいており、法量の傾向がやや異なる。以上のことから、筆者は本資料が弥生時代の後期後半から終末期にかけての時期に帰属する可能性が高いと判断する。

方形板刃先の全体的な出土傾向で言えば、筑後川中下流域は列島の中でも二日市地峡帯に次ぎ、佐賀平野と並んで方形板刃先の出土量が多い地域である。久留米市内の中心市街地側では古宮・大林遺跡で狭小な面積での発掘にも関わらず多数出土しているほか、塚畑遺跡、道蔵遺跡で出土がある(図6)。一方浮羽側の地域では、久留米市水分遺跡、朝倉市長島遺跡で出土があるが、久留米市街地側や二日市地峡帯周辺、佐賀平野北部に比べると分布が希薄な地域であった。したがって、本資料は表採品ではあるが、分布という面でも注目すべき資料と言える。方形板刃先が複数点出土する遺跡には環濠集落が多いことも考慮すれば、大井遺跡では遺跡範囲の特に南側に大規模な弥生時代集落が広がっている可能性が示唆され、今後の調査の進展が大いに期待される。

III. 石庖丁(図7・写真2)

本節では、石庖丁について記述する。玉泉館資料中に石庖丁は7点あり、表採地がそれぞれ異なっているため(図8)、ここでは1点ずつ資料の来歴、特徴を記載したうえで、可能なものについてはその位置づけを述べる。

1は「雑餉隈駅付近」での採集である。寄贈者である瀬尾外與蔵氏の経歴を見ると、明治7年に東京の三井組へ奉公に入った後、明治29年から三池炭鉱、田川炭鉱など九州の炭鉱の事業所と東京の本社を幾度か往復し、大正8年には瀬尾氏を主班として設立された瀬尾商店の若松支店へと移り、大正14年まで勤め上げたのち昭和2年に福岡市名島の自宅で逝去されている(瀬尾・瀬尾(編)1962, 林業発達史調査会1958)。瀬尾氏は一方で好古家、

特に古銭収集家としての一面を持っており、大正年間には貨幣に関する論考を専門誌に多数投稿している。瀬尾氏の関心は明刀銭など考古学的な分野にも及んでおり、実際玉泉館資料中の瀬尾氏の寄贈資料には明刀銭が含まれている(資料番号2036, 2037, 2038)。ただし、瀬尾氏寄贈資料にほかに古銭はなく全体としては本資料をはじめ石器や玉類が多いことから、収集資料のうち古銭を除いた考古資料のみが玉泉館に寄贈されたということであろうか。こうしたことをふまえれば、本資料は明治後半期から大正年間、瀬尾氏が福岡に在住している間に採集された可能性が高い。また、採集地の「雑餉隈駅付近」については、現在の西日本鉄道の雑餉隈駅のほかに、現在のJR南福岡駅付近が候補地となる。西鉄雑餉隈駅は大正13年に開業している(c.f. 星野2016:p.273)が、JR南福岡駅は明治22年(実質的には23年の可能性もある)に当時の九州鉄道の雑餉隈駅として開業しており、南福岡駅へと改称されたのは昭和41年のことである(c.f. 石野(編)1998:p.679)。したがって、駅の開業時期と瀬尾氏の福岡在住期間を比較すれば、どちらかといえば現在のJR南福岡駅付近での採集である可能性の方が高いが、西鉄雑餉隈駅開設後から瀬尾氏が逝去されるまでも3年ほどの期間があるため、厳密に特定することは難しい。

「雑餉隈駅付近」には弥生時代早期の木棺墓でよく知られる雑餉隈遺跡をはじめ南八幡遺跡、麦野遺跡が所在するが、大正5年以降中山平次郎氏が雑餉隈駅付近の遺物について何度か言及しており(中山1916, 1918b, 1931など)、古くから遺跡の存在が知られていたと見られる³。

本資料は頁岩製の完形品で、長さ14.8cm、幅3.3cm、厚さ8mmを測る。背部は研磨されておらず、敲打痕が残る。体部には研磨痕と敲打痕の両方を確認でき、敲打痕は孔の周辺にも残っていることから、敲打したのち両面から穿孔されたものと見られる。また特筆されるのは、幅が3.3cmとかなり小さく、孔と刃部との距離が非常に近いことである。刃部はほとんどの部分で刃付けされておらず丸みを帯びていることから、限界まで使いこまれた後研ぎ直しされずに廃棄された可能性がある。

2は「須玖岡本」での採集とされ、寄贈者は久我辰實氏である。近年、須玖遺跡群内での地区ごとの石庖丁出土量が整理されてきており⁴、なるべく詳細な出土位置まで特定できることが望ましいが、残念ながら本資料の

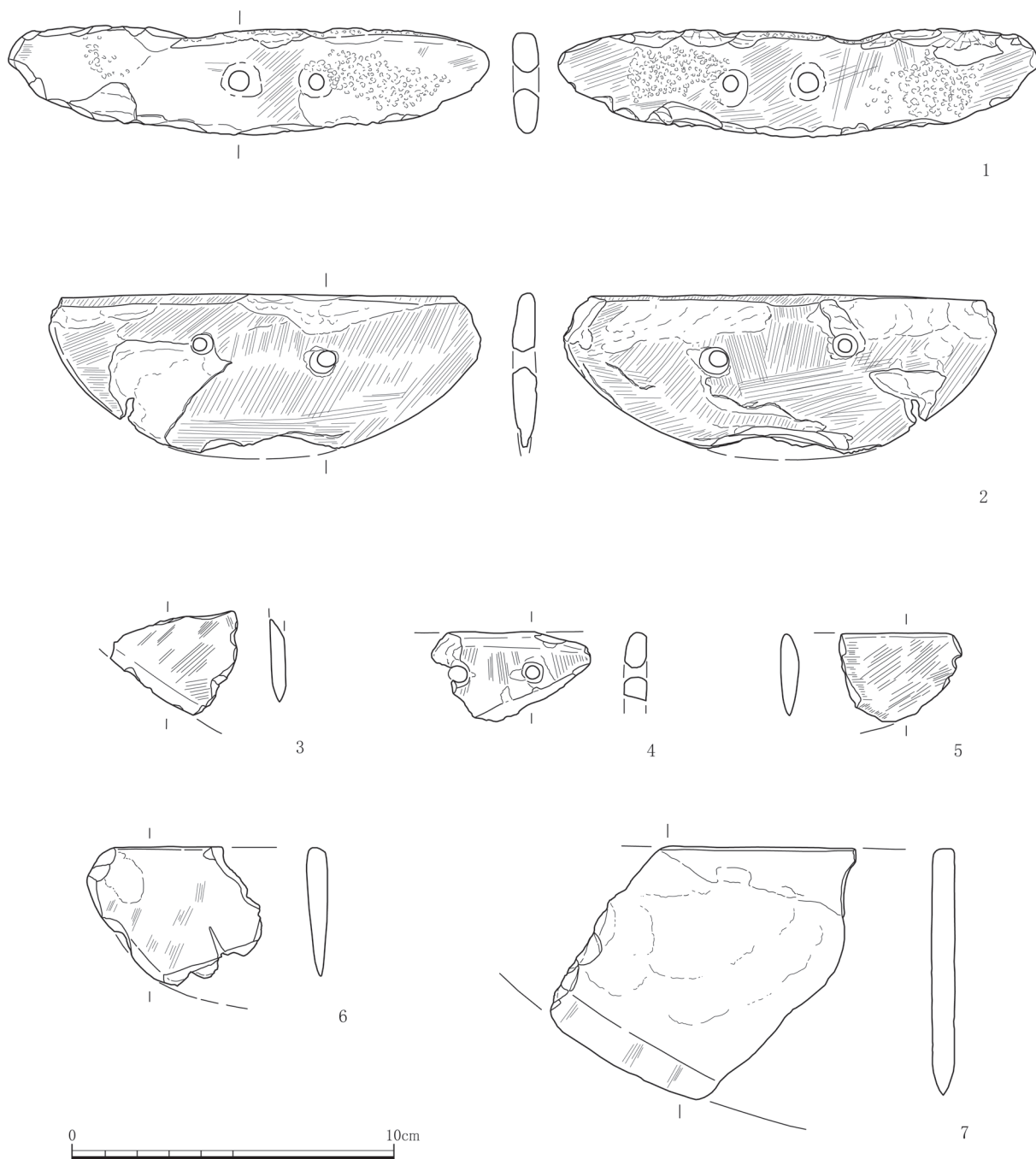


図7 玉泉館旧蔵石庖丁（縮尺1/2）

詳しい来歴は不明である。ただし、昭和4年に須玖岡本遺跡が京都帝国大学によって発掘された際の土地所有者として久我辰實氏が紹介されている（島田 1930）ことから推測すれば、本資料の出土地点として最も可能性が高いのは京都帝国大学による調査地周辺であろう。

本資料は赤紫色泥岩製で、立岩系石庖丁である。刃部側を一部欠損するが全体の形状を知ることができ、長さ13.3cm、現存幅4.9cm（復元幅5.1cm）、厚さ7mmを測る。体部に一部研磨が及んでいない範囲があるが、背部

まで全体的に丁寧に研磨され、両面から穿孔されている。孔の内径4mm、外径6-7mmという点から石製穿孔具による直接穿孔と考えられる。さらに、背部から孔の中心までの距離がA面左1.6cm、A面右1.9cmで、武末純一氏が検討した筑紫野市域出土石庖丁の計測値（武末 2001）を参考にすれば、本資料の孔径と背から孔までの距離は弥生時代中期の計測値の範囲内に入る。法量的な観点からは中期に属する可能性が高いであろう。

3-5は現在の久留米市高三瀬で採集された資料で、

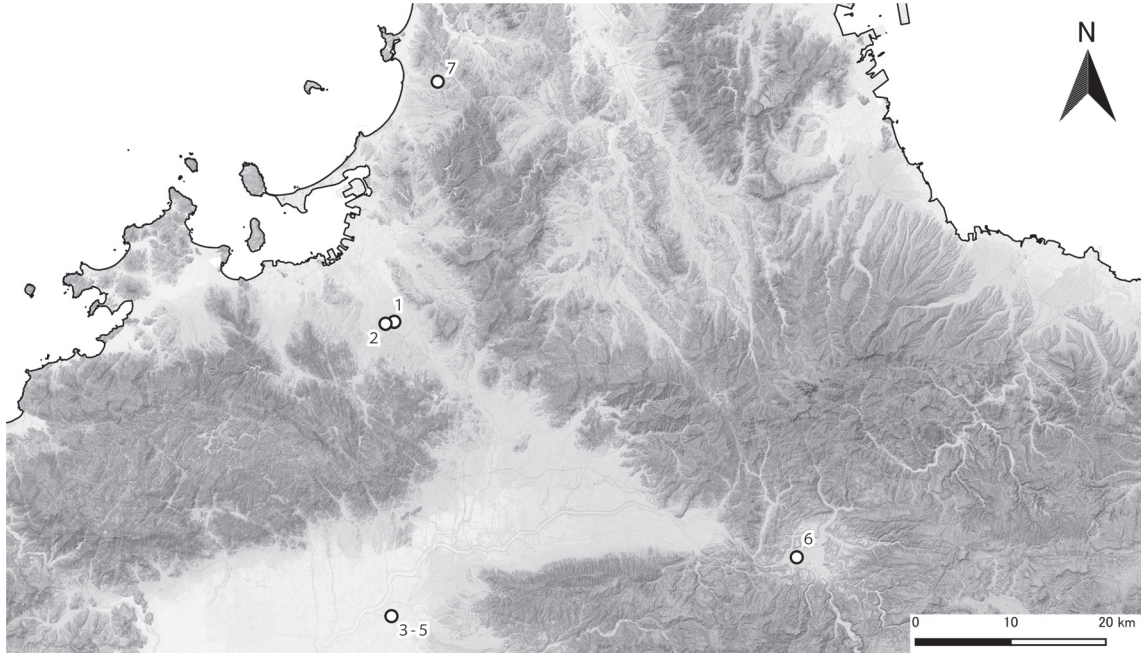


図8 玉泉館旧蔵石庖丁採集地点

3・5は塚崎東畑，4は塚崎西畑での採集である。3・4に関しては中山平次郎氏が収集したことが分かっているが，5も中山平次郎氏の収集品かは，発見地の字名の表記が微妙に異なっていることもあり確定はできないが，ここでは一括して記載しておく。塚崎東畑・西畑が高三瀧と一連の遺跡であることは中山氏が早くに指摘しており，高三瀧から塚崎にかけての地域で収集を行った土器や石器資料の一部は大正7年に『考古学雑誌』で発表されている(中山1918a)。中山氏の報告では高三瀧から塚崎にかけての一带で石庖丁片1点を表採したとあるが，塚崎東畑で発見された石器として挙げられているのは石鏃・石錐であり，本資料が中山(1918a)で触れられている石庖丁そのものかどうかはわからない。3・5は赤紫色泥岩製の立岩系，4は砂岩製である。

6は「日田市日田」での採集とされ，寄贈者は岡為蔵⁵氏である。岡氏は明治から昭和初期にかけて，出身地である築上郡の郷土史家として『吉富町誌』などの編纂に尽力した人物であり，師範学校卒業後には日田郡内の小学校に奉職していた期間がある(「吉富町史」編さん室編1983：pp.459-460)。したがって，本資料は日田の小学校に勤務していた頃に採集されたものであろう。なお，岡氏が築上郡や日田で収集した考古遺物は既に小田富士雄氏・武末純一氏・田中良之氏・松永幸男氏によって整理され，その成果が『岡為造氏収集 考古資料集成』(以下

『集成』と略称)として刊行されている。その中に日田吹上原採集の石庖丁も3点掲載されている(小田(編)1983：p.52)が，これら3点の中に本資料は含まれておらず，逆に『集成』に掲載されている石庖丁は玉泉館資料中にはない。『集成』付属の調査記録中に掲載されている，築上郡内で発見された遺物一覧を確認すると，「現所蔵者」の項目が「福岡高等学校」とされている資料がいくつかあるため，本資料も何らかの理由によって岡氏から福岡高等学校へと寄贈され玉泉館資料に入ったものと考えられる⁶。

さて，本資料は小破片のため判断が難しいが，赤紫色泥岩製と見られる。全体が研磨されている端部破片である。日田市域，特に日田盆地内には石庖丁を出土する弥生集落が多数存在し，立岩系石庖丁の出土遺跡も複数存在する。その中でも特に吹上遺跡では発掘調査で出土した石庖丁30点中14点と半分近くが立岩系で占められている(渡邊(編)2014)。『集成』記載の岡氏日田採集石庖丁3点がいずれも吹上原のものであることも合わせると，本資料も吹上遺跡の遺物である可能性がある。

7は玉泉氏による「宗像郡神興村大字津丸」での採集とされる。宗像郡神興村は現在の宗像市・福津市にあたり，津丸はそのうち福津市側である。津丸周辺では出町遺跡などいくつかの弥生時代遺物包蔵地があるが，集落の様相はあまりよく分かっていない。本資料は頁岩製で，

背部と刃部が研磨されており、刃部には使用に伴うと見られる光沢が若干発達している。破片ではあるが幅が大きく、本来は8-9cm程度あったものと見られることから、大形石庖丁の可能性⁷がある。宗像・福津周辺(図9)での大形石庖丁の類例として、現在報告されているものでは図10に示した資料があり、両端に突出部を持つ形態のものが多い。サイズや刃部形態での類似性はあるが、残念ながら端部を欠き確定はできないため、可能性の提示に留めておきたい。

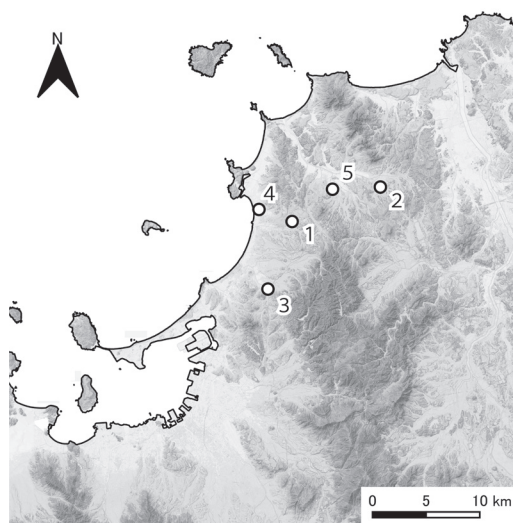
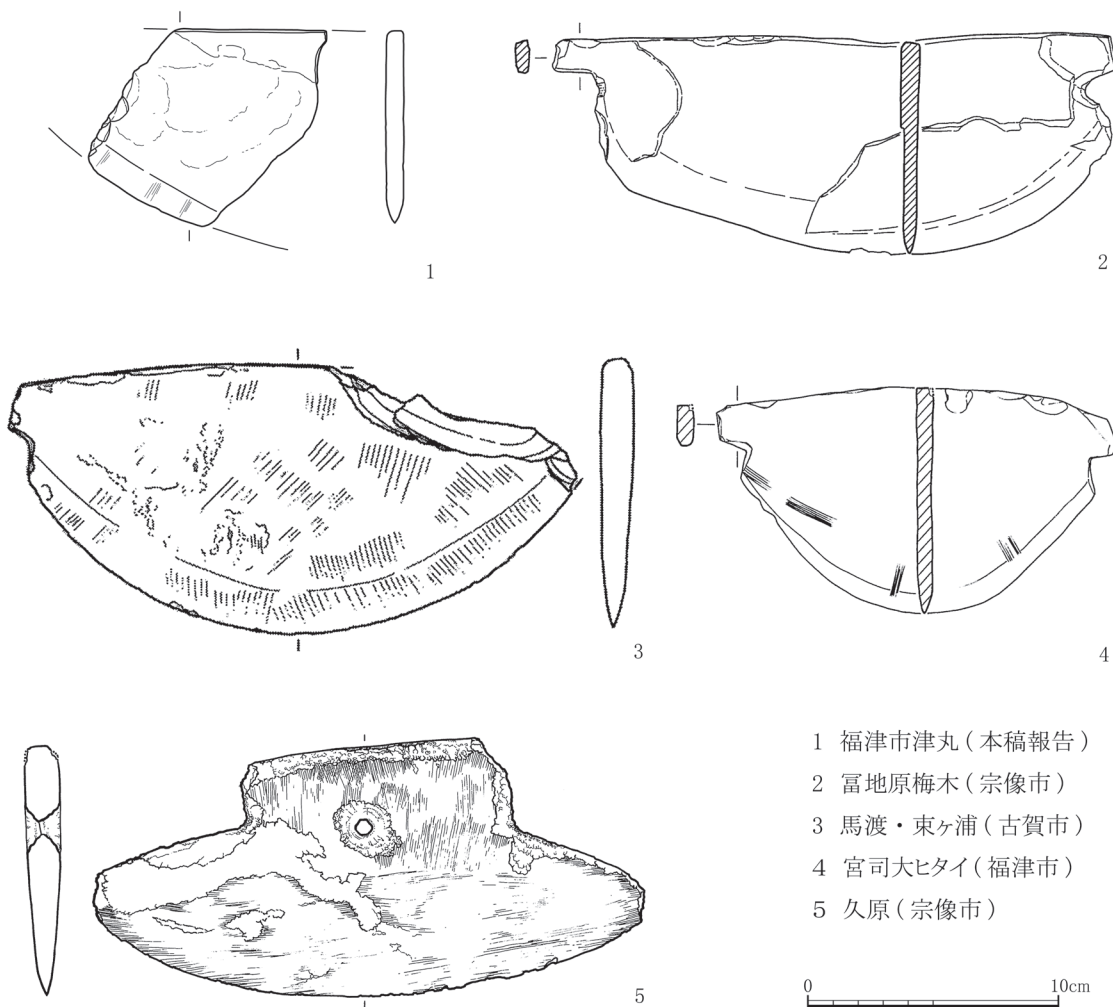


図9 宗像周辺における大形石庖丁の分布

IV. 今山系石斧製作関連資料 (図11・写真3, 4)

本節で記載するものは、今山の石斧製作関連資料8点である。これらは現状では器種が「石鎌」ないし「石ナタ」として登録されている。しかし、遺物自体を見ても、



- 1 福津市津丸 (本稿報告)
- 2 富地原梅木 (宗像市)
- 3 馬渡・東ヶ浦 (古賀市)
- 4 宮司大ヒタイ (福津市)
- 5 久原 (宗像市)

図10 宗像周辺地域出土の大形石庖丁 (縮尺1/3)

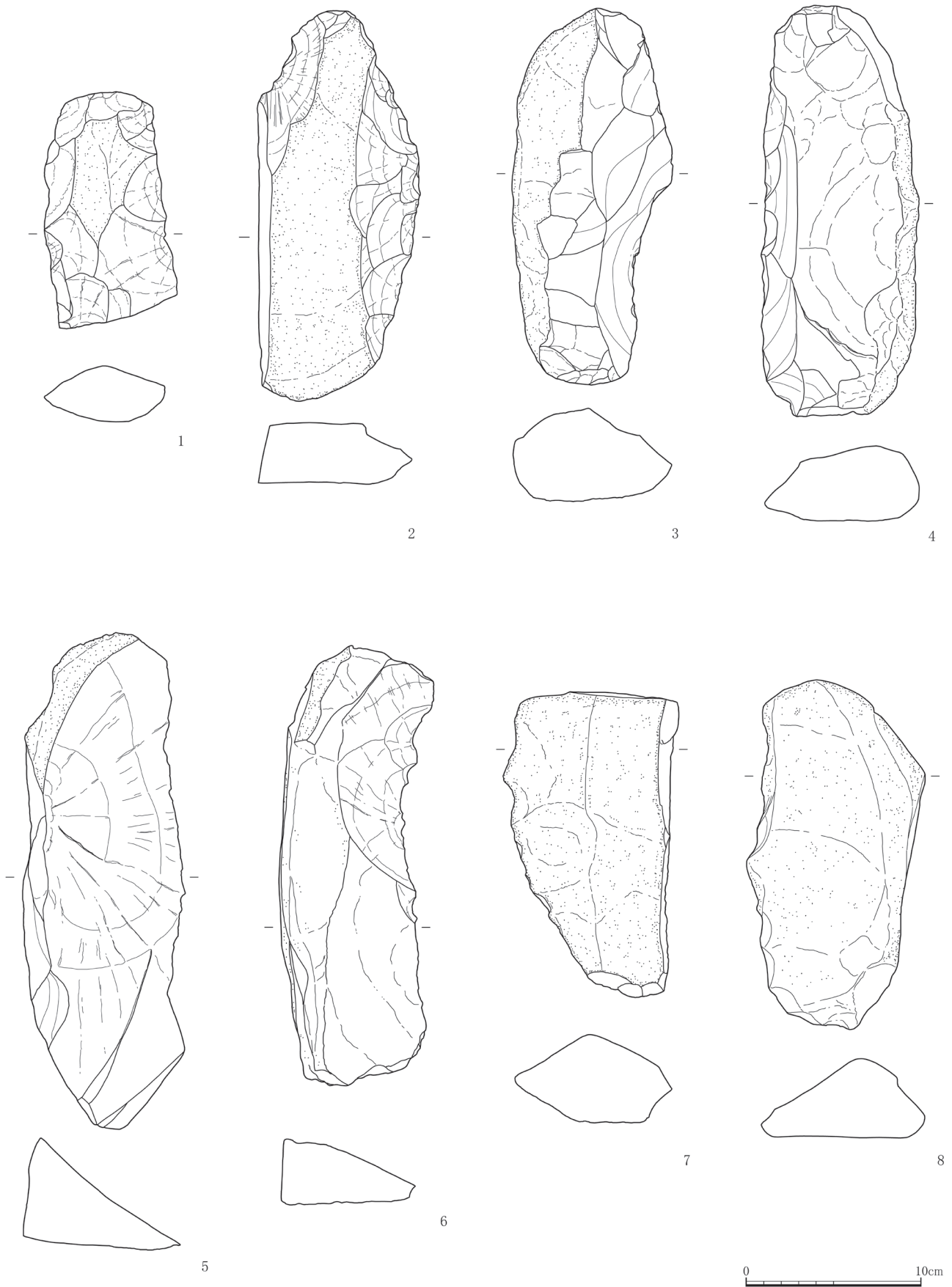


図11 玉泉館旧蔵今山系石斧製作関連資料（縮尺1/3）

また表採地が「今宿町今山」であることからしても、今山系石斧の未成品および製作関連遺物と考えるのが妥当である。玉泉氏によって寄贈されている「糸島郡今宿町今山」発見の資料中には当初より「石斧」として認識されている資料も含まれているが、ここではあくまで「石鎌」「石ナタ」とされている資料の器種認定を修正することを目的とし、他資料を含めた石斧未成品としての位置づけは今後の課題としたい。なお、玉泉館資料中の今山系石斧のうち、中山平次郎コレクションに含まれる今津貝塚出土品については、宮本一夫氏によって既に報告されている（宮本 2015）。

1 は粗割が概ね終了し打裂に入った段階の未成品と見られる。厚さが3.2cm と打裂段階にしてはやや薄手であること、平面形が若干弓形に曲がっていることから、「石鎌」と判断されたか。

2 は縁辺を打裂しているが表面に自然面が多く残っており、成形はあまり進んでいない。片側の縁辺のみが調整されていることで、片方の側縁に刃部が形成された「石ナタ」と判断されたか。

3 は片側側縁の打裂が進んでいるが、表面には自然面が多く残っている。この資料も片側側縁を刃部とする「石ナタ」と判断されたのであろう。

4 は石斧の未成品と考えたが、剥離が縁辺を除いて明確ではなく、成形はさほど進んでいない。

5・6 は大きな剥離の痕跡が残るものの、断面の形状から見て、ここから加工して大型蛤刃石斧になるとは考えられなかったため、石斧用の素材を割り出した後の剥片と考えた。

7・8 は剥離の痕跡が見られなかったため、素材の転礫と考えた。表採品なので、石斧の素材として集落に搬入されたものかどうかは分からない。

今回報告した石斧製作関連資料は縁辺を粗く剥離しただけの未成品、素材を割り出した後の剥片資料、素材である。詳しい検討はできていないが、玉泉館資料中の「石斧」として認定されている資料に比べて今回報告した資料は成形が進んでいないと見られ、製作が進んでいないことが影響して石斧として認定されなかった可能性がある。

V. その他（図12・写真5）

最後に、鉄器・石庖丁・石斧関連資料以外の器種、および器種を特定し得なかったものを図12に示した。

1 は玉泉氏によって「糸島郡今宿町今山」で採集されており、器種は「石庖丁？」とされている。石材は玄武岩である。上が厚く下に向かうにつれ薄くなっているため一見刃器のように思われるが、縁辺部が若干と体部に一か所大きな剥離があるのみで、刃器として加工されたものではない。剥片の類かと思われるが、正確な器種を判定できず不明とした。

2 は玉泉氏によって「糸島郡小富士村松原」で採集された「石庖丁」とされる。石材は堇青石ホルンフェルスで、表面の風化がかなり進んでいる。全体の形状を知り得ないので器種の特정이難しいが、背部が曲線をなすことから石鎌の可能性はある。

3 は寄贈者、採集地ともに不明の石器である。堆積岩系の石材で、縁辺に人為的な剥離が確認されるが器種は不明で、弥生時代の石器かもわからない。

4 は玉泉氏によって「築上郡南吉富村上垂水」で採集されており、器種は「石庖丁？」とされている。形状は一見石庖丁のようだが人為的な加工の痕跡はなく、凝灰岩の自然石であると思われる。

5 は中山氏によって「糸島郡今宿町今山」で採集されており、器種は「石庖丁？」とされている。4と同様、石庖丁のような形状ではあるが人為的な加工の痕跡はなく、玄武岩の自然石であると思われる。

6 と7 は玉泉氏によって「糸島郡今宿町今山」で採集された「石鎌」とされる。ともに玄武岩である。6 は片側の側縁が刃部のような形状を呈しているが、加工によって作り出されたものではない。7 も同様に加工された痕跡を確認することができなかったため、どちらも自然石とした。

VI. おわりに

本稿では玉泉館資料のうち弥生時代の農耕関連遺物について、資料の概要を提示し、可能なものについてはその位置づけや器種の再考を行った。資料に紐づいている情報が表採地点の大まかな住所と寄贈者、資料によって

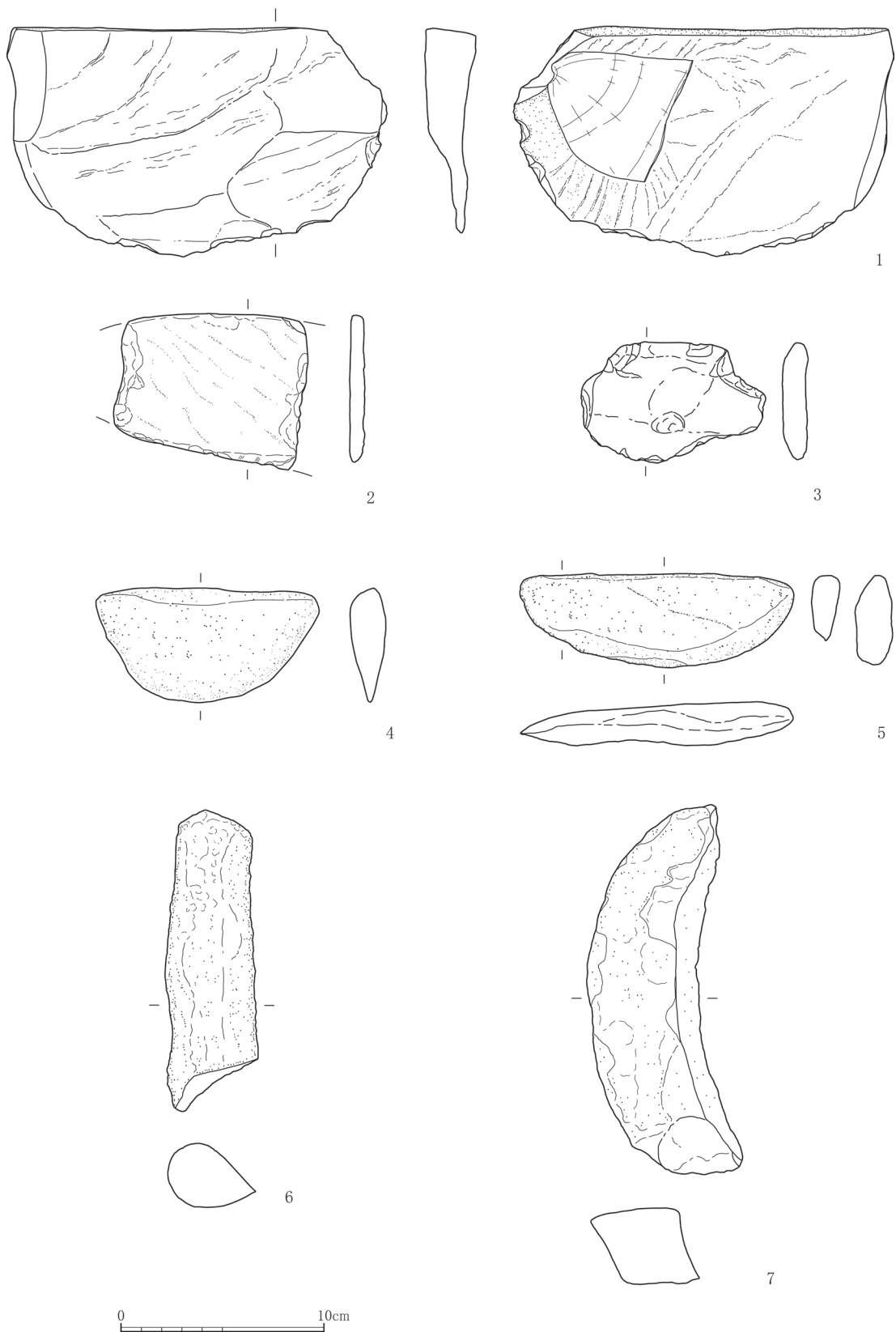


图12 玉泉館旧蔵器種不明等資料（縮尺1/3）

は表採日時が付く程度であるため、推測に頼る部分も多くなったが、できる限り出土地や来歴を絞りながら記載したつもりである。

とはいえ、方形板刃先は水縄小学校近辺に存在が示唆される弥生時代集落の内容を補強する興味深い遺物であるし、石器資料に関しては器種認定再考の必要があるものが含まれていたが、石鎌や石ナタ等とされてきた資料は今山遺跡における太型蛤刃石斧製作に関係する資料として検討できる余地があるというように、資料自体の価値は高いと考える。今後の玉泉館資料活用の一助となれば幸いである。

謝辞

本稿をなすにあたり、資料の整理・報告の機会を与えていただくとともに、資料の検索でもお力添えをいただきました。九州大学総合研究博物館の福永将大先生に感謝申し上げます。

また、久留米市文化財保護課の長谷川桃子氏には、水縄村の沿革や遺跡の調査状況等について多くの有益なご教示をいただきました。末筆ではありますが、記して感謝申し上げます。

なお、本稿は特別研究員研究奨励費（課題番号22KJ2448）の助成を受けたものです。

注

- 1 この種の鉄器の呼称は「方形板刃先」「鋏先」「鋤先」など複数存在するが、ここでは鋏ないし鋤に用途を限定しないことを意図して「方形板刃先」を採用した。
- 2 鬼塚氏・鏡山氏によって同日・同地点で表採されている資料はほかに鉄鑿（資料番号3133）、鉄器細片（3136）、弥生土器片（3137）がある。
- 3 中山氏が糸島の御松原で王莽代の貨泉を採集したのがちょうどこの時期で、『考古学雑誌』上での報告では貨泉を古銭家が鑑定したような記述も見られる（中山 1917：p.31）。推測に推測を重ねるようだが、中山氏が度々訪れている雑餉隈駅付近の遺物が瀬尾氏の収集資料の中に含まれているのは、そうした繋がりによっている可能性も考えられる。
- 4 出土傾向の詳細なデータは2023年2月25日の古文化研究会で山崎悠都子によって「石包丁の出土傾向から見る集落の様相」として発表されている。
- 5 岡氏の名前の漢字表記は文献により岡為「蔵」と岡為「造」があるが、ここでは玉泉館資料に紐付いている情報に準拠して「岡為蔵」とする。
- 6 ただし、『集成』付属の一覧中で現所蔵者が「福岡高等学校」とされているものと、玉泉館資料中の岡氏寄贈資料とはあまり対応せず、玉泉館に収蔵されるまでの来歴までは今回

明らかにし得なかった。

- 7 近年の石器使用痕分析の進展により大形石庖丁は稲の残屑処理に使用されていたことが明らかとなっており（斎野 1993, 1994, 斎野ほか 1999, 原田 2017）、石庖丁とは機能・用途が異なる。したがって、本来は大形石庖丁と「石庖丁の大型品」とは機能・用途によって弁別すべきだが、今回は使用痕分析を行えなかったため、法量や形態という観点から検討している。

参考文献

- 池ノ上宏（編）1993 宮司大ヒタイ遺跡——福岡県宗像郡津屋崎町所在遺跡の発掘調査報告——。津屋崎町教育委員会、津屋崎町。
- 石野哲（編）1998 停車場変遷大事典 国鉄・JR編 II。JTB、東京。
- 江島伸彦 2006 大井遺跡（第1次）。久留米市教育委員会、久留米市埋蔵文化財調査集報VIII。久留米市、pp.80-85。
- 小川原励 2018 大井遺跡（第2次）。久留米市教育委員会、平成29年度久留米市内遺跡群。久留米市、pp.111-113。
- 小田富士雄（編）1983 岡為造氏収集 考古資料集成。吉富町教育委員会、吉富町。
- 鏡山猛 1942 原始箱式棺の姿相（二・完）。史淵27：43-84。
- 木下修（編）1978 神蔵古墳。甘木市教育委員会、甘木市。
- 九州歴史資料館（編）1982 田中幸夫寄贈品目録。九州歴史資料館、太宰府町。
- 斎野裕彦 1993 弥生時代の大型直縁刃石器（上）。弥生文化博物館研究報告2：85-109。
- 斎野裕彦 1994 弥生時代の大型直縁刃石器（下）。弥生文化博物館研究報告3：31-68。
- 斎野裕彦・松山聡・山村信榮 1999 大型石庖丁の使用痕分析。古文化談叢42：37-50。
- 島田貞彦 1930 筑前須玖先史時代遺跡の研究。京都帝国大学文学部考古学研究報告第11冊、刀江書院、京都。
- 瀬尾弘・瀬尾功（編）1962 古銭研究随筆録。千倉書房、東京。
- 武末純一 2001 石器の生産と流通——石庖丁と蛤刃石斧を中心に——。筑紫野市史編さん委員会、筑紫野市史資料編（上）考古資料。筑紫野市、pp.528-555。
- 田主丸町誌編集委員会（編）1997 田主丸町誌 第三巻 ムラとムラびと下。田主丸町、田主丸町。
- 近澤康治（編）筑後国府跡 昭和62年度発掘調査概報。久留米市教育委員会、久留米市。
- 飛野博文（編）1991 名残IV——福岡県宗像市所在遺跡の発掘調査報告——。宗像市教育委員会、宗像市。
- 中山平次郎 1916 筑前国筑紫郡雑餉隈駅近傍の堅穴。考古学雑誌7（3）：8-9。
- 中山平次郎 1917 九州北部に於ける先史原史両時代中間期間の遺物に就て（一）。考古学雑誌7（10）：1-38。
- 中山平次郎 1918a 銅鉾銅剣竝に石剣発見地の遺物（上）。考古学雑誌8（8）：13-33。
- 中山平次郎 1918b 銅鉾銅剣竝に石剣発見地の遺物（下）。考古学

雑誌 8 (9) : 24-41.

中山平次郎 1931 雑餉隈駅付近に発見せる石蓋土壇と無蓋土壇.

考古学雑誌21 (9) : 1-20.

原田幹 2017 東アジアにおける石製農具の使用痕分析. 六一書房, 東京.

星野真太郎 2016 全国駅名事典. 創元社, 大阪市.

水原道範 (編) 1993 筑後国府跡 平成4年度発掘調査概要. 久留米市教育委員会, 久留米市.

宮本一夫 2015 中山平次郎採集今津貝塚資料. 市史研究ふくおか 11 : 18-25.

森貴教 2017 弥生時代の石器埋納 — 古賀市馬渡・東ヶ浦遺跡出土資料の紹介 —. 九州考古学92 : 111-121.

「吉富町史」編さん室 (編) 1983 吉富町史. 吉富町, 吉富町.

林業発達史調査会 1958 九州地方における坑木生産発達史. 林業発達史資料第77号

渡邊隆行 (編) 2014 吹上VI 自然科学分析調査の記録・調査の総括. 日田市教育委員会, 日田市.

図表出典

図1・7・11・12 : 筆者実測・トレース, 図4・6・8・9 : 筆者作成

図2 : 江島 (2006) より引用・加筆

図3 : 九州歴史資料館編 (1982) より引用・改変

図5-3・4 : 水原編 (1993) より引用・改変, 5-5 : 近澤編 (1988) より引用・改変, 5-6 : 木下編 (1978) より引用・改変

図10-2 : 飛野編 (1991) より引用・改変, 10-3 : 森 (2017) より引用・改変, 10-4 : 池ノ上編 (1993) より引用・改変, 10-5 : 斎野ほか (1999) より引用・改変

表1 : 筆者作成

写真 : 筆者撮影

Received Nov. 7, 2023; accepted Nov. 17, 2023

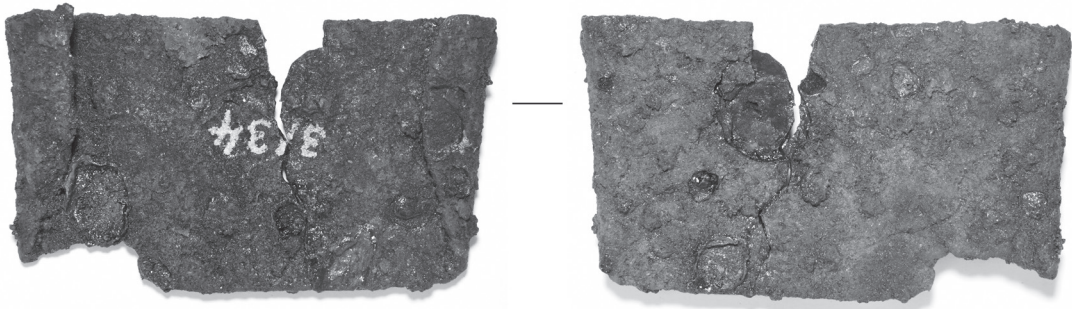


図 1-1

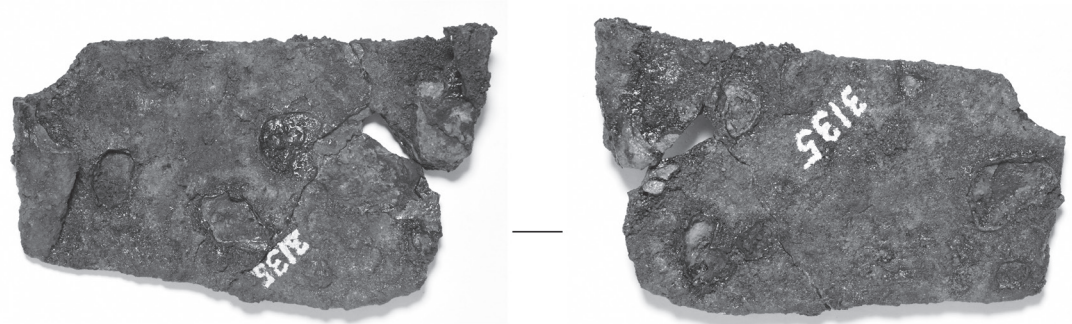


図 1-2

写真1 玉泉館旧蔵方形板刃先

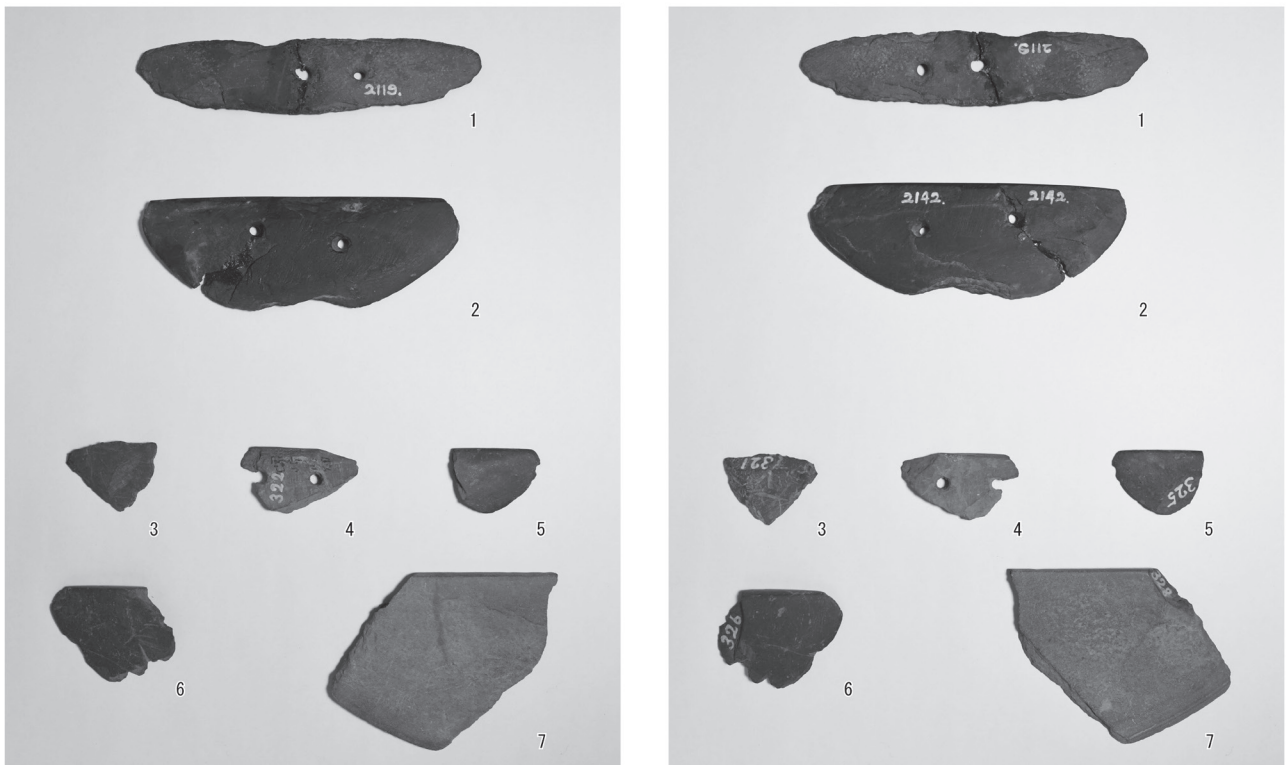


写真2 玉泉館旧蔵石庖丁



写真3 玉泉館旧蔵今山系石斧製作関連資料(1)



写真4 玉泉館旧蔵今山系石斧製作関連資料(2)

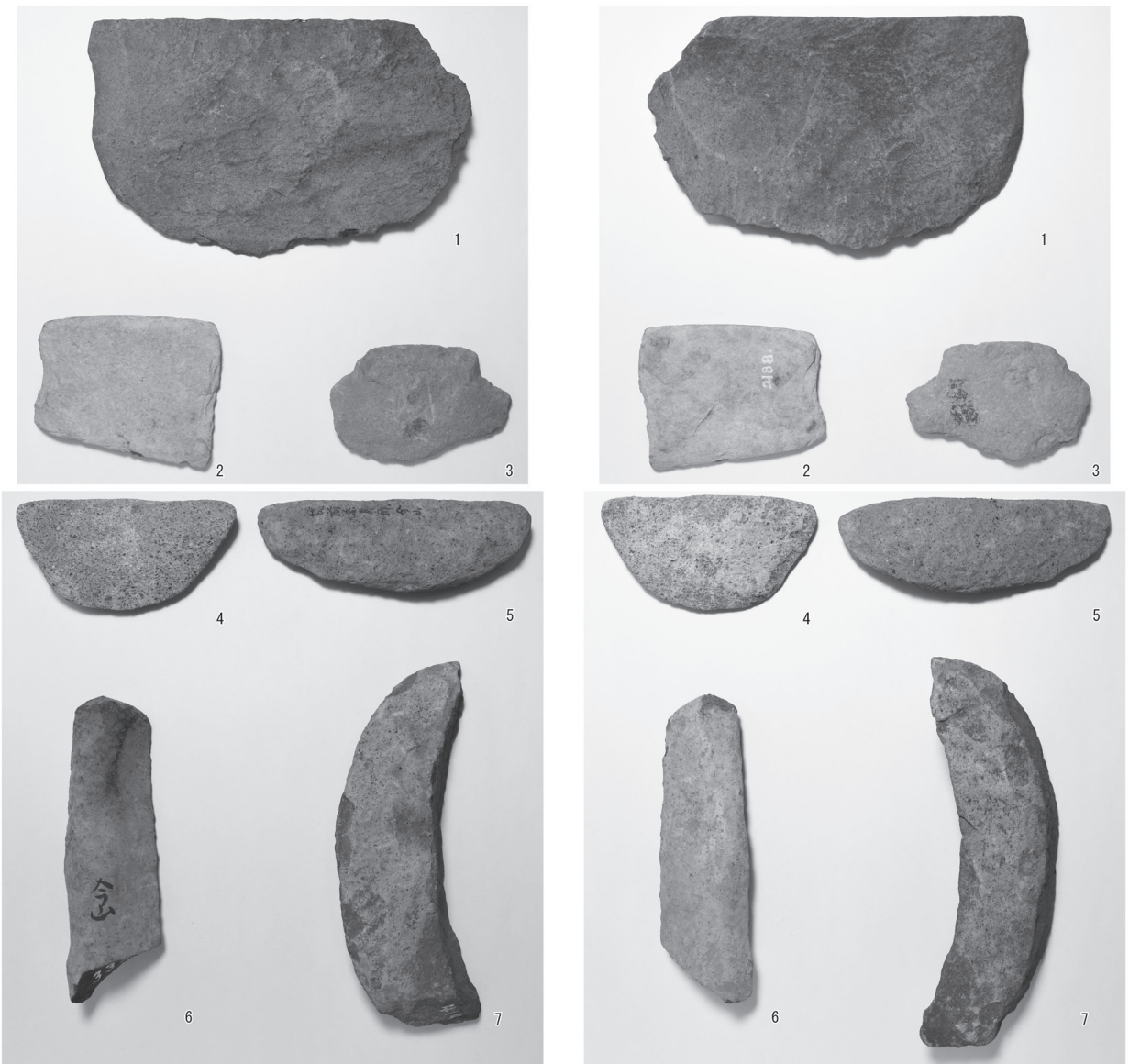


写真5 玉泉館旧蔵器種不明等石器

Iron and Stone Artifacts Related to Yayoi Period Agriculture in the Gyokusen-kan Collection

Mikishiro MATSUO

Graduated School of Integrated Sciences for Global Society, Kyushu University
744 Moto-oka, Nishi-ku, Fukuoka 819-0395, Japan

The *Gyokusen-kan* Collection of the Kyushu University Museum includes two iron artifacts and 23 stone artifacts registered under the names of artifacts related to agriculture in the Yayoi period. This paper reports on the significance of these artifacts by examining the sites where they were collected and the characteristics of these artifacts.

Key words: The Gyokusen-kan Collection, Yayoi period, agriculture, iron tool, stone tool